高等学校10年経験者研修（国語科）報告

加　藤　直　志

【抄録】 2014年度、高等学校10年経験者研修を受講した。なかでも、愛知県総合教育センターで受講した、教科研修（国語科）からは、多くのことを学ぶことができた。その際の、レポート課題の一部（「定番教材としての『こころ』の魅力、あるいは問題点（課題）について」）を掲載し、研修の報告としたい。

【キーワード】 高等学校10年経験者研修　国語科　現代文　夏目漱石　『こころ』　愛知県総合教育センター

１．はじめに

2014年度に、教員生活11年目を迎え、高等学校10年経験者研修を受講した。研修の内容は、社会体験研修、教科研修など多岐にわたった。それらの中でも、特に充実していた研修が、夏休みに愛知県総合教育センターで、のべ３日間にわたって受講した、教科研修（国語科）であった。初任者研修の際は受講者５名で行った教科研修であったが、今回は４名ということで、大学の少人数ゼミのような雰囲気での研修であった。人数が少ない分、模擬授業の回数やレポート課題が多いなどの大変さもあったが、濃密な研修で、多くのことを学ぶことができた。

教科研修の際に講師を務めていただいた、愛知淑徳大学の小倉斉教授から出されたレポート課題を本稿に再録し、研修の成果を報告することとしたい。

２．定番教材としての『こころ』の魅力、あるいは問題点（課題）について　―「下　先生と遺書」告白体の「近代性」に気付かせる授業―

小倉先生からは、「夏目漱石『こころ』の指定部分を熟読し、定番教材としての『こころ』の魅力、あるいは問題点（課題）について、2000字程度にまとめる」という課題が出された。この課題について、「―「下　先生と遺書」告白体の「近代性」に気付かせる授業―」という副題を付し、次のようなレポートを提出した。（一部分、実際に提出したレポートを修正している）

私はこれまでに授業で２回『こころ』を扱ったことがある。また、今年度、高校２年生の現代文を担当していることから、３回目の授業をもう間もなく行う予定である。１回目と２回目では、勤務先が異なるため、生徒の学力差や地域性、気質の違いなどもあった。しかしながら、それらの違いを越えて、多くの高校生にとっての『こころ』は、「お嬢さん」をめぐる「私」と「K」の三角関係を読むことが中心になっており、また、そこに『こころ』の魅力を見出している生徒が多いといえるだろう。恋の三角関係という、現代でも起こりうるような設定に、引き込まれるのだ。

だが、それは同時に、教材としての『こころ』の持つ、問題点を浮かび上がらせているともいえる。極めて基本的なことではあるのだが、教科書の中の一教材という形で生徒達に提供される以上、『こころ』のごく一部分、「お嬢さん」をめぐる「私」と「K」のやり取りの後半部だけを読んで、『こころ』を論じることになってしまうということである。もちろん、教科書に全文を掲載することは不可能であるし、一年中『こころ』だけを授業で扱うわけにもいかないため、これは仕方がない面もある。しかしながら、それによって、捨て去られてしまうことがあまりに多いのが残念である。そこで、このレポート課題をきっかけとして、私にとって３回目の『こころ』の授業では、教科書に掲載されていない箇所も、自主教材として配布し、より広い視野から『こころ』を論じてみることとしたい。

具体的な授業構想の前に、私が年度当初の「現代文Ｂ」の授業で、生徒達に話したことに触れておく。「国語総合」の現代文分野との違いとして、高等学校学習指導要領を引用し、「現代文Ｂ」では「近代以降の様々な種類の文章」「近代以降の文語文などを用いることができる」と書かれていることを説明する。ここで「近代」という言葉がキーワードとして出てくるので、まずは「近代」について知っていることを生徒達に問いかける。たいていは、「明治以降」などと時代区分のことを答えるので、「では、なぜ明治以降が近代で、それ以前と区別されているのか」と問いかける。高校生には難しい問いなので、「では、何でもいいので、近代的だと思うものをあげろ」と言うと、「科学技術」「民主主義」「個人主義」などがあがってくることが多い。これらをもとに、私が、ニーチェ・デカルトなどにごく簡潔に触れた後、「資本主義」「国民国家」「国語」などの術語も紹介しながら、「近代」についての話をした。「現代文Ｂ」の

教科書のすべての教材が、「近代」について考えるのにふさわしいわけではないし、また、そうある必要もないとは思うが、「古典よりは読みやすいし、赤点もとりにくいから楽」という浅い理解だけではなく、現代文の授業を通じて、自分たちが生きている／生きてきた社会がどういうものかについて、少しでも自覚的に考えるような機会にしたいと考えている。

さて、３回目の授業で『こころ』を扱うに際し、特にどのような部分を意識し、生徒達に何を伝えたいのかを考えた。今回、このレポート課題を通じて、『こころ』を再読した際に、一番気になったことは、「上　先生と私」と「下　先生と遺書」との文体の差異である。一読すれば誰でもわかることかもしれないが、「下　先生と遺書」の一部分だけを教室で読むという、教材としての読み方だけでは案外こぼれ落ちていることが多いはずだ。「上　先生と私」では、「私から見た先生」という書き方が徹底している。小説の語り手は、あくまでも語り手なのだから、「先生」の内面を全知的視点から語ってもよさそうなものだが、そうではない。例えば、「先生はようやく得心したらしい様子であった。しかし私にはその意味がまるで解らなかった。」（17ページ）、「当時の私の眼に映った先生と奥さんの間柄はまずこんなものであった。」（28ページ）、「先生がどんなに苦しんでいるか、これも私には想像の及ばない問題であった。」（30ページ）。これらは、漱石が前近代の物語や戯作などとの差異を強調した文体とも考えられる。つまり人の考えていることは、他人からはわからない、その言動から推測するしかないという、より現実に即した人間の描き方を試みたのではないだろうか。その上で、「先生」の内面を語るのが、「下　先生と遺書」の１人称語りである。そう考えると、定番教材としての『こころ』において、多くの国語科教員が授業で解説する箇所であろう「私はちょうど他流試合でもする人のようにＫを注意して見ていたのです。（中略）罪のないＫは穴だらけというよりむしろ明け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の眼の前でゆっくりそれを眺める事が出来たも同じでした。」（248ページ）も、全知的視点を持った語り手に頼ることなく、他者の内面を描こうとした、極めて「近代」的な文体にも思えてくる。

３回目の授業では、「上　先生と私」の一部も読ませながら、「私」と「Ｋ」との三角関係に加えて、このようなことも生徒達に考えさせてみたい。

※『こころ』の引用は、ちくま文庫（1985年）に拠った。

以上のレポートを８月に提出した。小倉教授からは、貴重なご助言をいただくことができた。また、研修終了後、本校の高校２年生の現代文Ｂの、後期の授業で、レポートに記した内容を実践した。『こころ』の授業の最後に、このレポートの一部も紹介し、『こころ』を通じて「近代」について考えさせる機会とした。

３．おわりに

以上、教科研修の際に作成した課題の一部を紹介した。教科研修は、これらのほかにも、講義・模擬授業「国語科における授業構想と指導の実際」（宮崎千智・愛知県立知多翔洋高等学校教頭）、講義「郷土の文学教材を活用した授業実践の意義と実際」（加藤伸夫・愛知県立中村高等学校教諭）、講義・模擬授業「『詩』としての魅力に迫る俳句の授業」（小池秀男・愛知淑徳大学教授）、講義・模擬授業「小説の読解と教授法について―〈小説（フィクション）を愉しく「読む」方法〉―」（小倉斉・愛知淑徳大学教授）、模擬授業・講義「韻律を意識して短歌を作ろう」（小崎早苗・愛知県総合教育センター研究指導主事）など、盛り沢山の内容で、大変充実した研修を受講することができた。また、研修全般を通じ、愛知県総合教育センター研究指導主事の牧野昌子先生、一緒に受講した３名の県立高校の先生方からも多くのご教示を得た。研修でお世話になった皆様方に、改めて御礼申し上げる。この研修で学んだことを、今後の指導に活かしていきたい。